慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松村正義氏学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.11 (1979. 11) ,p.108- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19791115-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

松村正義氏学位請求論文審査報告

松村正義氏の提出論文「戦時広報外交の研究――日露戦争における金子堅太郎――」の構成は、次の通りである。

序

第一部　金子の使命

第一章　政府の内命

第二章　米国の厳正中立

第三章　開戦当初の米国人の対日感情

第四章　ルーズベルトとの交誼

第五章　広報「活動ノ本拠」

第二部　金子の活動と画期的演説

第一章　武士道精神と騎士道

第二章　寓意的演説法

第三章　ロシアからの一時的広報攻勢

第四章　外債募集への支援

第五章　キリスト教国対異教国説

第六章　監視すべきドイツの動静

第七章　セント・ルイス万国博覧会

第八章　ハーバート大学同窓会

第三部　黄禍論の防止

第一章　ロシア軍艦、中立国遁入問題

第二章　外国新聞特派員

第三章　財政広報の積極化

第四章　金子の論文『黄禍ハ日本ノ黄金時期ナリ』

第五章　ロシア大使カシニー伯爵の苦悶

第四部　戦局の推移と外交の展開

第一章　首都ワシントンと文化講演

第二章　ドイツ皇帝からの重要親書

第三章　ロシアに対する革命煽動の密使

第四章　ロシア自由友誼会

第五部　使命の成功

第一章　交際の季節

第二章　イェール大学シンポジューム

第三章　「日本ノ最良友」ルーズベルト

第四章　戦後の極東問題に高まる関心

第五章　奉天会戦の捷利

第六章　ルーズベルトの不変的好意

第七章　カーネギー・ホール

第八章　軍人読法七ヵ条

第九章　日英同盟礼賛論

第六部　親日感情の高潮と反動

第一章　マウント・バーノンへの郊遊
第二章　親日的米婦人の協力
第三章　吉兆―大統領の狩猟―
第四章　変兆―潮流に変化の兆―
第五章　日本海海戦の大捷
第七部　ポーツマス講和会議と金子の秘匿的行動
第一章　広報活動の停止
第二章　金子の新任務―「連鎖ノ任」
第三章　窮境に立つ日本全権団
第四章　辛うじての講和成立
第八部　米国における日露戦争
第一章　桂・ハリマン覚書の破棄
第二章　米国民と日露戦争
付録　イェール大学で生れたポーツマス講和条約の「元」型

本論文は、日露戦争外交史の中で、従来未開拓の領域であつた広報外交に焦点を集注した研究である。わが国における日露戦争は総じて、軍事史、戦略史、ないしは外交史に重きがおかれ、対象を戦闘戦局に限つた戦争史か、開戦講和を対象とした外交交渉史が多く、また最近の研究は、戦争史そのものよりも、日露戦争の性質をめぐる論争史という形で進められて来た。そこには、軍事戦闘面では、谷寿夫著「機密日露戦史」、外交接渉面では、外務省編纂の「小村外交史」の如き価値高いものがあるが、戦時中の対外活動については、財政面における高橋是清、謀略工作面における明石元二郎などに注目したものがあるに拘らず、対外広報面においては、殆んど見るべき研究が行われていなかつた。このような空白部分をうめるものとして、アメリカにおける金子堅太郎の戦時広報外交という重要な側面に、適確精密な照射をあてた研究が本論文である。

この戦時広報外交については、西欧諸国において夙にとりあげられて居り、殊にアメリカにおける日露戦争の研究は、戦争史よりも戦争宣伝の側面が重視されて、日露戦争は中立国において世論をかちとるための闘争の好先例とされていたのである。この点において本論の筆者は、ニューヨーク総領事館の広報文化担当領事として三年半にわたる在勤時代自ら米国東部各地に日本紹介を試みた実践活動を通じて、日露戦争当時の金子堅太郎がセオドア・ルーズベルト大統領との親交を主軸にして対日友好世論形成のため東奔西走した実績を追跡調査し、その現地に足を運んで資料を収集検査した結果、豊富貴重な材料を入手して帰国したのである。筆者は、帰国後も金子研究を続行し、外務省外交史料館、国会図書館憲政資料室において裏付け資料を探索しまた内外の関係者と連絡交信を重ねて、その業績を確認整理すること八年にして、本論文をまとめ上げたのである。

右の内容は、八部四二章、原稿千五百枚に及び、印刷して五七八頁の尨大なものであるので、逐次紹介することを避け、その大要を摘記するにとどめれば、左の如くである。

一、冒頭まず第一に、日露戦争の背景から説き起され、その困難な国情を弁えた伊藤博文から英米依存の基本線上に米国味方化という重大使命を金子が要請された事情が明らかにされる。それは、日本の軍事的、財政的能力の限界を知つて、米英両国民の世論を何としても日本に好転しなければならない事情があつたからである。

伊藤から米国の対日世論親善化工作を懇請された金子は、結局成功の自信がないままに応諾して、明治三七年二月二四日、これまた外債募集という重大使命を帯びて渡航する高橋是清と同船して米国に向う。これは、筆者が外交史料館にある文書から発見したものであるが、両者が同じサイベリア号で渡米したことに双方とも言及していないのは何故であるかという問題がある。それは、講和を終えて帰国直後に、小村が桂・ハリマン協定覚書を破棄したことと関連するという重大指摘であるが、これは後述される通り、外交史上従来全く究明されていなかつた所である。

二、渡米後の活動は、まずルーズベルト大統領との接近から始められるが、その由来を明らかにしつつ、急速な親交関係が進展して、同大統領の惜しみない協力を招く経過が綿密適切に述べられる。首都ワシントンに赴いて大統領に表敬するけれども、「将来籌画運動スベキ方面ハ、合衆国政府ニ在リト謂ハンヨリ寧ロ米国人民総体ニ在ルヲ以テ、政治ノ中枢地ヲ捨テテ民心嚮背ノ焦点、輿論発作ノ枢地ヲ取ル」必要があるとして、首都でなく大民間都市ニューヨークに自己の事務所を開設する。金子の広報技術は、新聞を買収するようなことは全くせず、むしろ大学、協会、クラブなどの世論をつくり出す知識層の招待に積極的に応じて、〝多数の人に面会する人〟に面会するという、いわばオピニオン・リーダー層と接触する方法をとつたのである。また、新聞雑誌にも進んで寄稿して、新聞記者との接触或は情報交換を怠らなかつた。その適例ととして、四月一四日ニューヨークのユニバーシティクラブ及び同二八日ボストンのハーバート大学における演説は大成功を収め、以後の広報活動は軌道に乗つたのである。その説述話法は、日本側宣伝のみでなく、時に敵側ロシア提督の戦死を悼むという武士道精神を発露しつつ説き及ぶなど、事例や文書統計を豊富に交えて情理に訴えて聴衆に諄々と説いたのであるが、がつて八年にわたり米国に留学した金子の英語力がマーク・アントニオを凌駕するといわれた程卓抜したものであつたことも、その好評を博した一因であつたといえよう。金子の広報領域が政治外交に限られることなく、日本人の看過しがちな宗教問題、婦人問題まで及んだことなども効果を高めたと思われる。金子はすでに七十数年前に現代の広報技術を自ら実践していたのである。

三、従来殆んどわが国で知られていなかつた事実が本論文で指摘されているのは、金子が明治三七年十月、ポーツマス会議に遥かに先立つて講和条約について準備を始めていたことである。それは、講和条約の元型ともなるべき情報の入手であつた。金子は、イェール大学の教授陣から、彼等が行つた対露講和条件に関するシン

ポジュームの結果を受取つたのであるが、その通報が後に影響を当路者に及ぼして、領土問題と償金問題が講和の絶対条件から相対的条件に変更されることになつたと思われる。これを、本論文の筆者は、イェール大学スターリング記念図書館と外務省外交史料館の双方所蔵文書から発掘したのである。

四、講和会議開催以後、金子は小村全権の登場と共に後面に退く。すなわち、表向きの広報活動を停止し、ただニューヨークに引続き留まつてポーツマスの小村とオースター・ベイのルーズベルトとの間をとりもつ隠密な「連鎖ノ任」につくのである。ここに、それまで米国民の八〇パーセント以上を親日化させることに成功した金子の退場と反対に、開戦以来米国世論に不評を買つていたロシアが、ウィッテ全権を送り、その巧妙な新聞操縦によつて瞬く間に米国世論を親日から親露へと大きく転換することになる。金子が講和会議期間中広報活動を行わなかつたことは惜しまるべきである。

五、ポーツマスの講和成立後、帰朝した小村が桂・ハリマン覚書を破棄したことは周知の事実であるが、その背後事実を本論文は実証的に解明していることは、注目に値する。鉄道王ハリマンの資本的後楯には、高橋是清の外債募集に非常な協力寄与をした金融業者シフ商会があり、これと激しい競争関係にあつたモルガン財閥系銀行家モントゴメリー・ルーズベルトは、大統領を通じて金子と連繋をもつていたのである。桂・ハリマン覚書の中絶は結局、ハリマン・シフ・高橋の線に対してモントゴメリー・ルーズベルト・金子の側が勝利したことを意味し、その結果として、高橋と金子の間に感情的齟齬を来したわけである。

六、日露戦争は、単に軍事面、外交交渉面、財政(外債募集)面、或は謀略工作面だけでなく、中立国に対する友好世論形成という広報面でも、日露間で激しく戦われた戦争であつた。特に金子の使命は、米国世論の対日友好化を背景にして、その個人的接触を生かしながらルーズベルト大統領を講和の斡旋者としてとりこむことにあり、金子はそれに見事に成功したのである。いわば、極東における戦場においてのみならず、国際政治場裡において、日露戦争は、言論戦に関する限り、少くとも米国では日本がロシアに優勝していたのである。この点を顧みるならば、金子の功績は、軍人の功績に勝るとも劣らないのである。金子は、当時米国に駐劄した高平公使のような特命全権公使でもなく、まして正規の大使でもなかつたが、その時期における、彼の行動に着目するならば彼こそはまさに現代における「広報担当大使」にほかならなかつたというべきである。しかも、そのスケールの大きさという点からいうならば、米国大統領と対等に接触していることから、それは今日では想像出来ないほど卓抜したものであり、金子の戦時活動は、日本外交史上空前絶後の記録であるといつて差支えない。

この金子の功業は、大山、東郷、小村などの蔭にかくれて、それは注目を浴びることがなかつたが、しかしそれは、日露戦争を勝利

に導いた要因として、決して無視することの出来ないものである。

提出論文は、日露戦争における金子堅太郎に焦点をあててその対外広報活動を縦横に分析したものであり、それは、日露戦争研究の一角に新機軸をうちたてたということが出来る。その視座は適確であり、実証資料の収集検討は極めて豊富周到である。しかしながらその素材探求が広汎にわたる余り、平俗な事例をかかげすぎた嫌いがある。そのため、論旨明快となつた反面、その表現形式において軽妙に走りすぎたことが認められる。しかしかかる瑕疵は、全体としての本論文の価値を損うものではない。この提出論文は、わが国における戦時広報外交という前人未踏の分野を開拓した先駆的意義をもつのみならず、日露戦争外交史において、未知の部分を開示し、新資料を発見した独創的研究として、外交史学に対する寄与を高く評価することが出来る。ここに、本論文の学問的価値を認め、松村正義氏が、法学博士（慶應義塾大学）の学位を授与されるに適格であると認定する。

昭和五四年九月二八日

主査　慶應義塾大学教授　法学博士　内山正熊

副査　外務省外交史料館々員　文学博士　栗原健

副査　慶應義塾大学法学部教授　池井優